〈中学校　学年経営〉

生徒一人ひとりの良さや可能性を活かす学年経営

―アンケート調査と実践を通して―

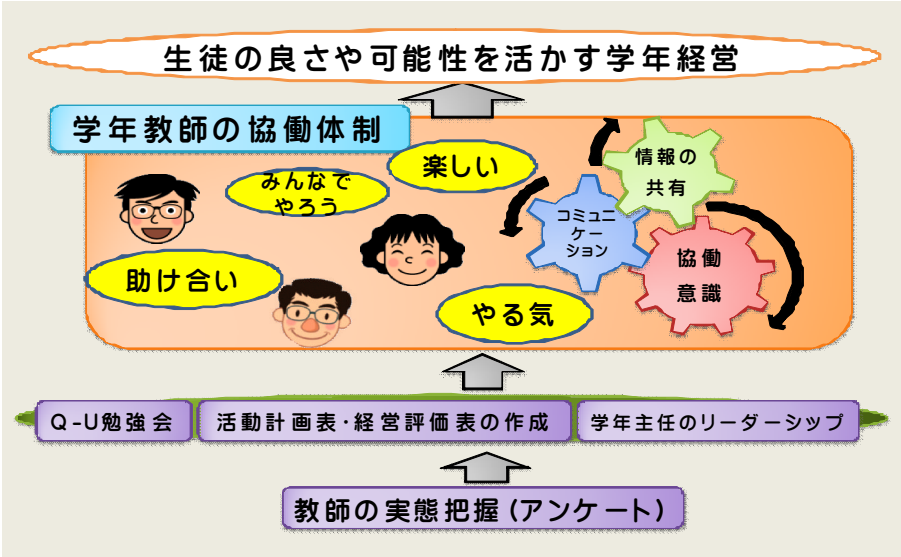
南風原町立南星中学校教諭　　大　城　正　篤

1　研究の目的

今日の学校現場は，「教師の指導力」や「生徒の生きる力をはぐくむ」ことが求められている。しかし，学年主任として，教師集団を機能させることが十分でなかったり，校務の多忙化による教師間のコミュニケーション不足から，生徒への支援体制がうまく図れない場面も時にしてあった。

そこで，アンケート調査により中学校の教師の実態を把握するとともに，Q-U（学級生活における生徒の満足度調査）の活用や，学年活動計画表や学年経営評価表の作成を通して，協働実践する学年経営の在り方を明らかにすることを目的とする。

2　研究の特徴



3　研究の実際

(1) アンケートの実施

○島尻地区管内本島の中学校教師へアンケートを依頼し，教師の実態を把握

(2) Q-U の勉強会

(3) 年間活動計画表の作成

○行事ごとの PDCA サイクルを表記

○学年活動と各領域の関連がわかる

(4) 学年経営評価表の作成

○学年教師，担任，担任外と対象項目別

○わかりやすく記入しやすい

4　研究の成果

(1) 実態調査をすることによって，島尻管内中学校の学校現場教師の意識を把握することができた。

(2) Q-U 活用の勉強会を実施することによって，学年教師間の目的の共有化や参画意識を図ることができた。

(3) 教師の協働体制を図るため，学年活動計画表や学年経営評価表の作成が提案できた。

〈中学校　学年経営〉

生徒一人ひとりの良さや可能性を活かす学年経営
―アンケート調査と実践を通して―

南風原町立南星中学校教諭　　大　城　正　篤

Ⅰ　研究の目的

求められる教師像

近年，少子高齢化の進行による社会の変化，情報化社会等による価値観の多様化から，教育を取り巻く環境は急速に変化している。今日の学校現場は，「学校の経営力」「教師の指導力」，さらに児童生徒の知・徳・体の調和のとれた発達を目指す「生きる力」を育むことが学校教育に求められている。本県の第３次教育推進計画の中でも，「自ら学ぶ意欲や学力の向上，豊かな表現力とねばり強さを持つ児童生徒の育成」や「学校・家庭・地域社会の相互連携を図る」等の教育の目標があげられている。その様な状況の中で教師に必要とされる力量として「授業力」，「生徒指導力」，「保護者・地域との連携力」が考えられる。

学校の現状

学校教育における教師の活動は，生徒の心身の発達に直接関るものであり，児童・生徒の人格形成に大きな影響を及ぼすものである。しかしながら実際の学校現場では，それを取り巻く様々な環境から，多忙感を感じる教師が増加しているように思われる。不登校生徒への対応や，多様な価値観を持つ生徒･保護者への対応など学級経営に悩む教師も多い。

したがって，教師は生徒・家庭の多様性が増している現状を踏まえ，学校・学年組織の中でより確かな生徒理解を図ることが重要である。すなわち複数の教師の目から多面的に生徒を捉え理解し，その上に立って個々の生徒の指導方針や指導方法を話し合い，指導・支援の手立てを確かなものとして共有することが求められ，他の教師と協働して取り組む教育活動がますます重要となる。

生徒一人ひとりが，よりよい学校生活を送るために，私達教師は日々教育活動の実践に取り組んでいる。しかし，すべての生徒がその目的を達成できたかは，必ずしもそうとは言い難い。生徒指導充実の面から，本県の平成 22 年度の「学校教育における指導の努力点」の中でも，「積極的な生徒指導の充実を図るため，学年主任を中心に〈学年で育てる〉という認識のもと，各教科担任等と緊密に連携し，共通理解，共通実践に基づいた学年経営に努める。」とある。私自身が学年主任として，それぞれの教師が持っている良さの伸張や，教師集団を機能させる事が十分でなかったり，校務の多忙化による学年教師間のコミュニケーション不足から，生徒に対する支援体制がうまく図れない場面も時にしてあった。

学年を活性化するためには，学年主任のリーダーシップで学年教師が活き活きと業務遂行できる学年体制作りを進めていく必要がある。学年主任が，学年行事，生徒支援，生徒指導等様々な場面において，学年教師の共通理解を図り，協働実践を推進していくことで，生徒の変容は目に見えてくると考える。

本研究において

そこで本研究では，アンケート調査により島尻地区管内の中学校の教師の実態を把握するとともに，実践活動を通して「生徒一人ひとりの良さや可能性を活かす学年経営」の在り方を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ　研究の目標

教師の実態把握および，協働実践を通して生徒一人ひとりの良さや可能性を活かすための学年経営の工夫を図る。

Ⅲ　研究の方法

1　学校現場教師の現状把握のために，島尻地区管内の中学校教師に対する，意識調査の実施と分析。
　(1) 学年主任対象：島尻地区管内（本島内 18 校）
　(2) 全教師対象：島尻地区管内の小規模校及び中・大規模校から 5 校を抽出
2　Q-U（QUESTIONNARIE-UTILITIES:学級診断尺度調査）　テストを活用した協働実践。
3　学年経営の理論研究及び，学年活動計画表や学年経営評価表の作成。

Ⅳ　研究の内容

1　実態調査

学年経営の在り方を研究するにあたり，学校現場教師の現状把握を行うためにアンケートによる実態調査を行った。

(1) アンケートの実施方法
　① 時期　　6 月
　② 対象　　島尻地区管内本島中学校
　　○ 学年主任　18 校 54 名へ依頼　　（回答 17 校　51 名）
　　○ 学年主任外　大中規模校　3 校
　　小規模校　　2 校　（回答　計 70 名）

工夫点

(2) アンケート項目
　① 短い時間で気軽に答えられるように，学年主任対象を 11 項目，学年主任外対象を 9 項目にしぼった。
　② 学年主任と学年主任外の意識の違いをみるための共通項目を設定した。
　③ 学年主任用には「学年経営で心がけていること・悩んでいること」など自由記述項目を設けた。

2　学年経営について

(1) 学年経営の意義

学年経営とは，学年主任を中心とした学年の教師集団が，学校教育目標や学校経営方針を受けて学年目標を設定し，学年生徒の発達段階や実態を考慮しながら，その目標達成のために，計画，実施，評価，反映というサイクルをもとに組織的に教育活動を実施していくものである。

学年経営の機能

学年経営は学校経営と学級経営の間に位置するものである。学校経営との関係においては，学年経営が学校教育目標・方針に反映するものであり，中学三年間の教育活動と関連付けると，他学年との連携も重要である。学級経営との関係においては，同一学年の各学級が横につながるという形での連絡調整を図る機能を持っている。

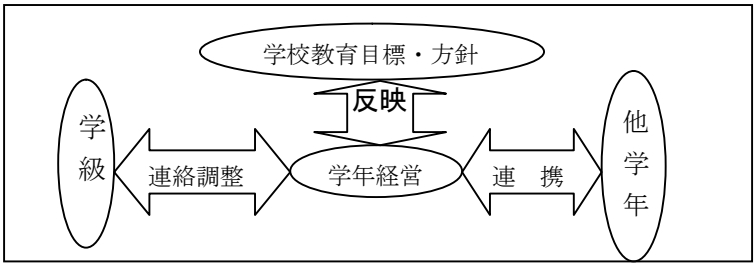


図１　学年経営の機能

学年経営の重要視すべき内容として日俣周二氏は著書「学年経営」の中で以下の四点を挙げている。

① 授業の計画，実施，評価について相互の情報伝達，指導助言が必要であり，学級担任と教科担任の協力が必要。
② 生徒指導については学級の枠を超えて，学年教師が協力して行う。
③ 学年教師相互の研究・研修を行う。
④ 校務分掌に関して学年組織で処理できるものは，共同・分担して効率化を図る。

(2) 学年組織の協働体制

共通理解と共通実践

生徒一人ひとりの良さや可能性を活かすには，学年の教師団で生徒理解をし，課題の掌握・解決と目標達成を目指した共通理解・共通実践を行う協働体制の確立が必要である。

教科指導の面では，中学校は教科担任制であり，複数の教師で授業を担当することや，少人数指導，習熟度別指導，ティームティーチング等いろいろな協働体制による指導の工夫が展開されている。また，生徒指導の面でも，中学生は様々な事に影響され易い多感な年頃であり，日々，心と体が成長・変容していく特質を持ち合わせていることから，個々の教師に任せっきりにするのではなく，複数の教師の眼から多面的に生徒を捉え理解し，その上で生徒個々の指導方針を話し合い，指導の方向を確かなものとすることが求められている。

３　学年主任の役割

(1) 学年主任の職務

今回のアンケートから学年主任の年代層は，40 代 68%，50 代 32%，30 代と 20 代は０％という順で，学年主任の多くが中堅教員という立場である。その中堅教員に求められる資質について教育職員養成審議会第３次答申の中には，「学級・学年運営，教科指導，生徒指導の在り方に関して広い視野に立った力量が必要とされる。主任等の重要な役割を担ったり，若手教員への助言・援助など指導的役割が期待されることから，職務に関する専門知識や幅広い教養を身につける必要がある。」とある。さらに，学年主任の職務については，学校教育法施行規則によると「学年主任は，校長の監督を受け当該学年の教育活動に関する事項について連絡調整及び指導，助言にあたる」と定めてある。

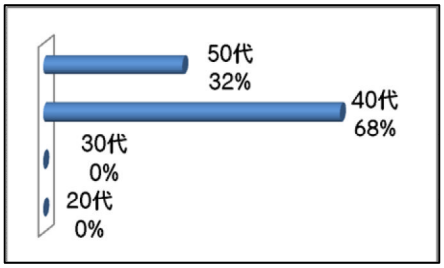


図２　学年主任の年代層

以上のことからも学校内における学年主任の役割は大きいものである。学年教師をまとめ，活力ある学年経営を推進させることや，学年教師と管理職とを結ぶ役目など，学年主任のリーダーシップの在り方が学年経営に大きく影響すると考える。

(2) ミドルリーダーとしての学年主任

学年主任はミドルリーダー

学年主任は管理者と学年・学級の間に位置する。管理者の学校経営目標・方針を学年経営に活かす側面と，学年教師の意向を吸い上げ，学校経営に反映させる側面がある。そうした両側面を持ち合わせていることから学年主任はミドルリーダーと称されている。

学校組織内でのパイプ役

学年主任はミドルリーダーとして，コミュニケーションを通して学校組織内でのパイプ役となっている。その具体的な役割として次のことが挙げられる。

① 管理職の指示を受け，学年内における連絡・調整
② 学年教師間への連絡・調整や，助言と支援
③ 他学年の学年主任との連絡・調整

こういった学校組織内の活性化が，学年の活性化へとつながり，結果として生徒一人ひとりの良さや可能性を活かすことにつながると考える。

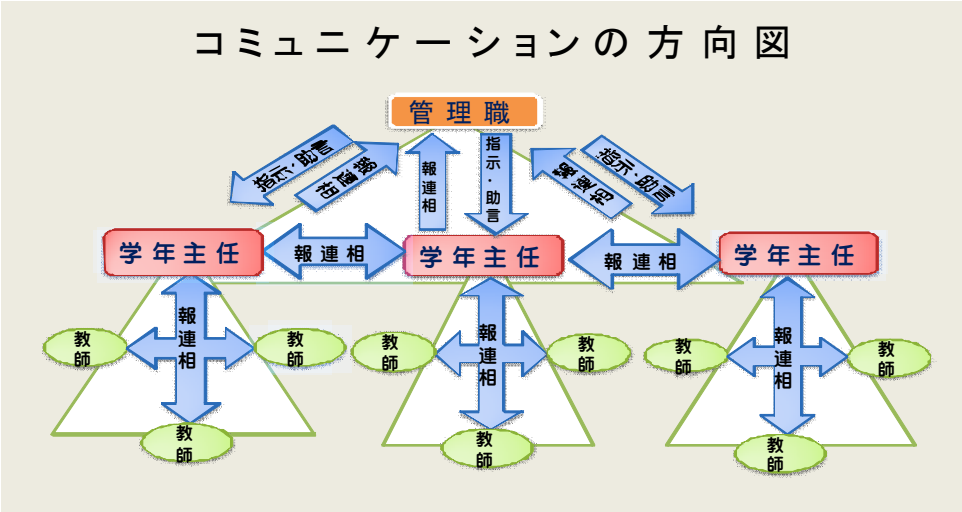


図３　学年主任のコミュニケーションの方向

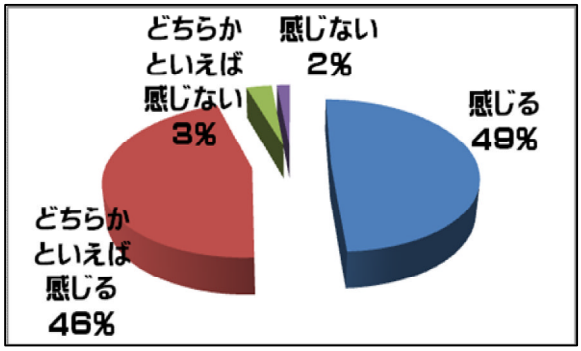
Ⅴ　研究の実際

１　実態調査から見えてくること

(1) アンケートの結果と考察

※注：項目１～項目８，及び項目 10 は全教師対象。項目９は学年主任対象。

項目１：「日々の学校現場で多忙感を感じますか」



「感じる」49%，「どちらかといえば感じる」46%とどちらも過半数に近い数値を示し，「感じる・どちらかといえば感じる」になると 95%と非常に高い数値を示している。一方で，「感じない」2%，「どちらかといえば感じない」3%とどちらも一桁の低い数値である。

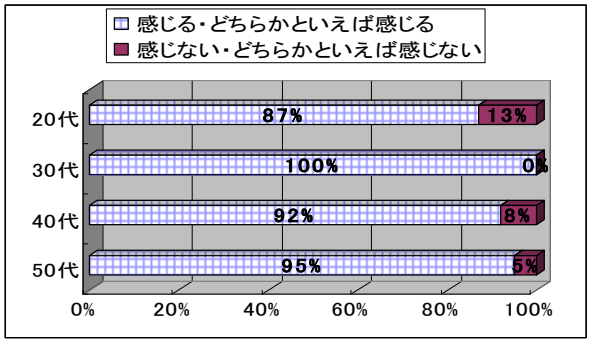
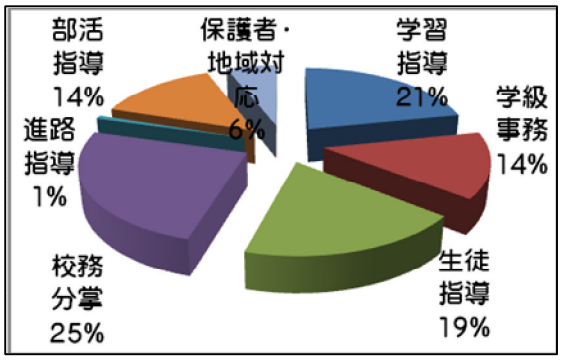


図４　年代別に見る多忙感

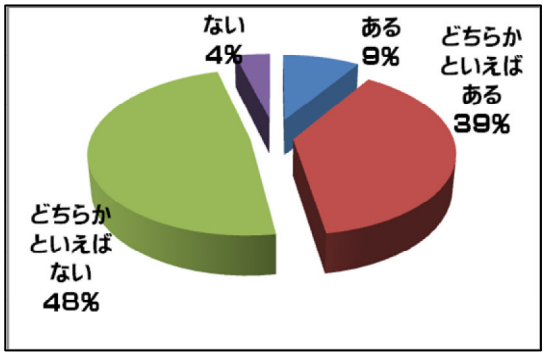
項目１の結果から「感じる・どちらかといえば感じる」と答えた人を年代別のクロス集計で見てみると，30 代が 100%，50 代が 95%，40 代が 92%，20 代が 87%と続いている。30 代は担任･校務分掌･部活指導等，多様な職務に関わっていることが考えられる。40 代，50 代は経験を生かした実践のゆとりを感じる。40 代，50 代の豊富な経験を若手教師に伝えていく職場の雰囲気が大切である。

項目２：「多忙感を感じる要因は何ですか」（回答は上位３つ以内）



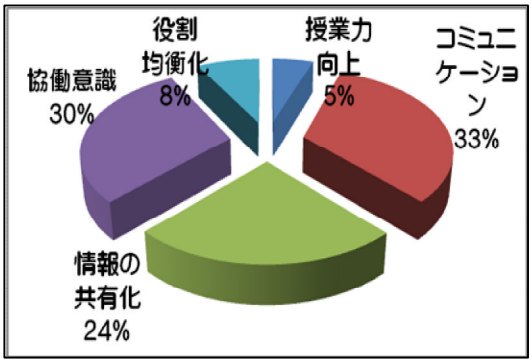
「校務分掌」に関するが 25%で最も高い。先生方の業務の多様化が背景にある。続くのが「学習指導」「生徒指導」「部活指導」「学級事務」である。「保護者や地域への対応」は 6%と低い。これは毎日のことではなく，また，学校との関係も良好なのであろう。「進路指導に関する」は特に 3 学年に大きく関わることであるからか 1%と最も低い。

項目３：「学校現場では同僚とのコミュニケーションがとれる時間が十分にありますか」



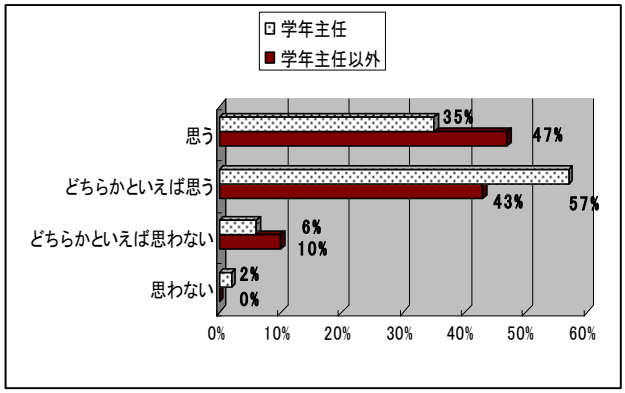
「ある」9%，「どちらかといえばある」が 39%であり，「ある」「どちらかといえばある」を合わせると 48%である。「どちらかといえばない」48%，「ない」が４%であり，「どちらかといえばない」「ない」を合わせると 52%で似たような数値である。半数近くの教師が，情報の共有を図る手段であるコミュニケーションの時間が少ないことがわかる。

項目４：「学年職員体制を高めるためには何が必要だと思いますか」（回答は上位３つ以内）

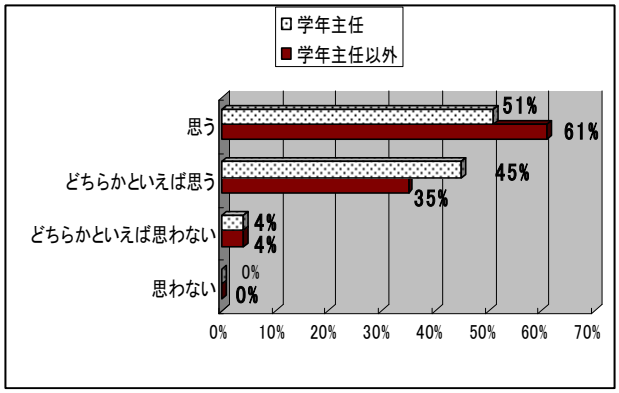


「コミュニケーション」33%，「協働意識」30%，「情報の共有化」24%の順に特に必要度が高いことがわかる。「協働意識」や「情報の共有化」も，教師間のコミュニケーションがあってこそ形成されるものである。よって，コミュニケーションの必要性が求められていることがわかる。以下「役割の均衡化」8%，「授業力向上」5%と続く。

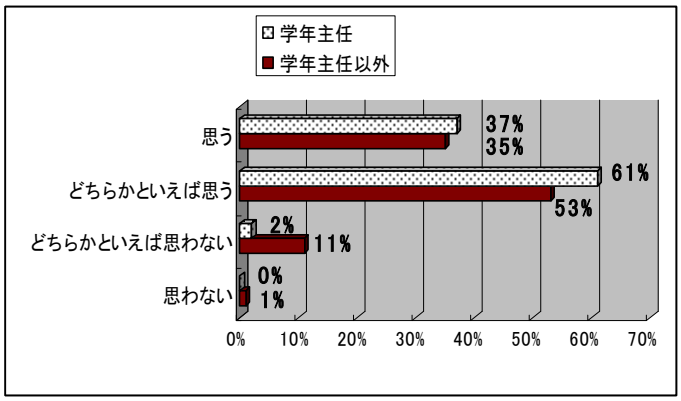
項目５：「悩みや困ったことがあれば，相談しやすい学年雰囲気ですか」



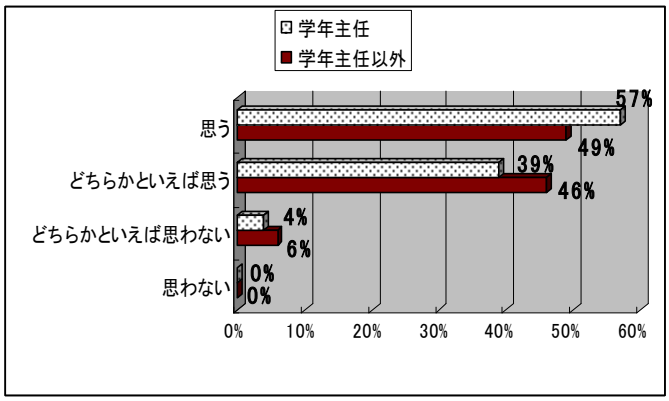
項目６：「担任会や学年会では，誰でも気軽に発言できる雰囲気が作られていますか」



項目７：「学年情報が，学年職員で十分に共有されていますか」



項目８：「学年では職員が団結して取り組む協働の意識が十分に高いですか」

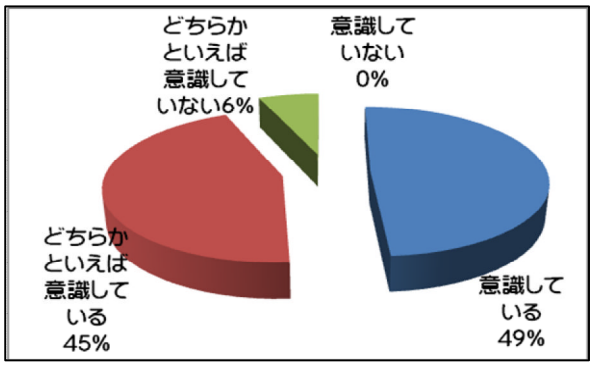


項目４のグラフより「学年職員体制を高めるために重要なこと」が，「コミュニケーション」「協働意識」「情報の共有化」の必要度が高いことがわかったが，学年において学年主任と学年主任以外の先生方で認識の違いがあるのかを項目５～項目８のグラフで見ることができる。

「コミュニケーション」「協働意識」「情報の共有化」のいずれに関してみても，「そう思う」あるいは，「どちらかといえば思う」が，学年主任も学年主任以外の先生方でも 40%～60%と高い数値を示し，そのいずれについても，学年主任と学年主任以外の先生方の両者で認識の違いがあまりない事を示している。「そう思う」「どちらかといえば思う」を併せて肯定的な認識として捉えると，90%を越える非常に高い数値を示している。この結果は，学年主任を中心に，学年の先生方の協力も併せて教師の協働体制が図られていることが推測される。

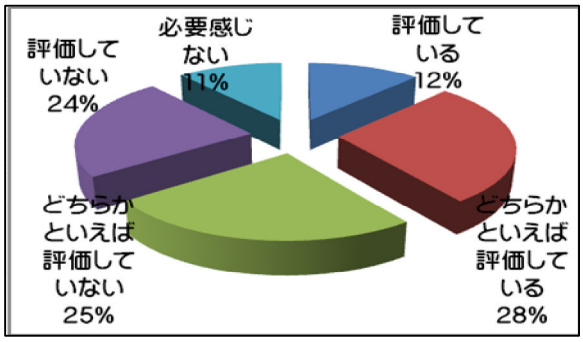
一方で「情報の共有化」に関して，学年主任以外の先生方は「思わない・どちらかといえば思わない」が唯一 10%以上を示している。また，学年主任との比較でも一番認識のずれが大きい。このことは今後の課題といえる。

項目９：「学年経営計画は，学校教育目標の達成を意識していますか」



「意識している」が 49%，「どちらかといえば意識している」が 45%とどちらも高い数値を示し，「意識している」「どちらかといえば意識している」を合わせると 94%という非常に高い数値を示している。これは殆どの学年主任の先生方が，学年での教育活動は，学校教育目標の達成に反映すべきという考えのもとに実践していることがわかる。

項目 10：「学年の共通実践で，評価表等を使って成果と課題を評価していますか」



「評価している」は 12%に止まり，「評価していない」はその 2 倍の 24%で，全体の四分の一を占めている。また，「評価している」と「どちらかといえば評価している」を合わせても 40%で数値的に高くない。P-D-C-A サイクルから考えても，今後の注目すべき課題と考えられる。

(2) アンケートから見える学年主任の意識

学年主任の先生方（51 名）を対象にしたアンケートの中で「学年経営で心がけていること，悩んでいることについて」自由記述形式（複数回答）をとり，その意見を要約した。

表１　学年主任として心がけていること

・情報の共有化　　15 人 /　・学級担任がやりやすい環境作り（副担任の協力）　10 人
・学年職員にできるだけ負担をかけない（適材適所で分掌割り当）10 人
・学年職員とのコミュニケーション　９人
・助け合える雰囲気・楽しい雰囲気作り　９人　/　・共通実践（生徒指導・行事等）　９人
・学年主任として学校全体・他学年・学年のパイプ役になること　　５人
・学年行事等の早期計画・運営　　３人
・保護者との連携　/　・生徒が学年に帰属意識をもてるような活動取り入れる
・勤務時間外に校務が及ぶときには職員の了解を得ること　また配慮を考える
・学年職員の個々の指導力を活かす　/　・生徒の安全管理

表２　学年主任として悩んでいること

・校務の多忙で学年会や放課後の話し合いの時間がとれない　コミュニケーション不足　８人
・連携とれず足並みそろわない（共通実践に温度差）７人　/　・総合の計画・準備でゆとりがない　６人
・校務分掌の偏り　５人　/　・生徒指導で忙しい　３人
・主任としての校務（対外的な対応，職員の調整等）３人
・同じ条件（子育て・補充）のメンバーが多い　/　・学年の意見が通らない
・学年職員が忙しいので，自分でひきとり自分の空き時間がない
・（部活指導してない・おそくまで残れない理由で）女性の学年主任として引け目を感じる

２　Q-U を活用した協働実践と，学年主任のコーディネート機能

生徒への支援・指導

(1) Q-U 活用の目的

所属校では，Q-U は年度１回の５月に実施しているが，そのデータを活かせていない現実がある。継続的な生徒への支援・指導を考えると，その後のデータの活用の必要性を感じていた。また，Q-U は学年教師間の協働体制を高める手段としても下記のような有効性があげられる。

参画型学年会

○ データが客観的なので，担任だけでなく，他の教師にもわかりやすい。
○ 各クラスの状況を学年教師で話し合うので,情報の共有化とコミュニケーションが図れる。
○ 学年教師各々が意見を伝え合うことができるので，参画意識が高まる。
○ 各クラスへの支援・指導を，学年教師のチームとして取り組むことで協働性が高まる。

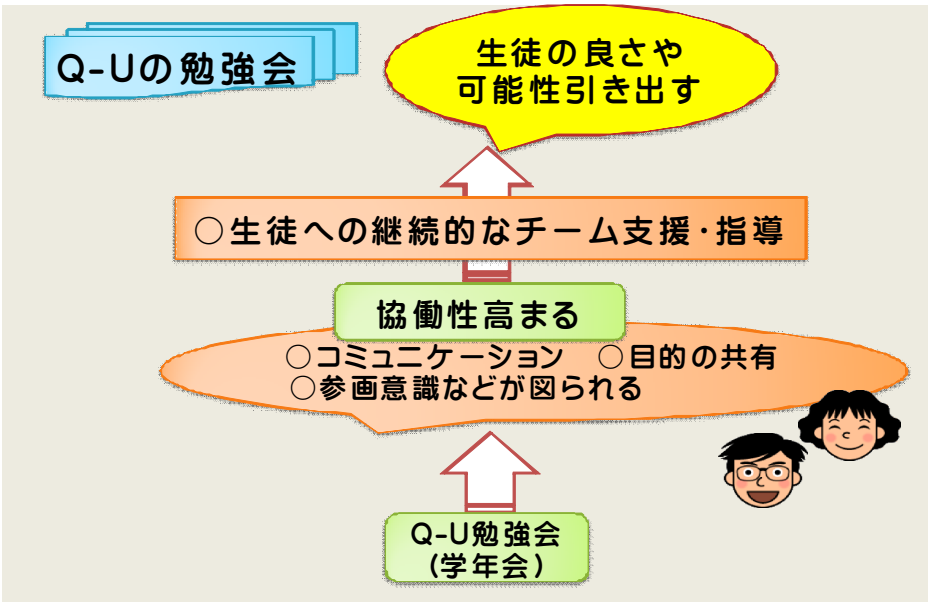


図５　Q-U の活用

家庭・地域・関係機関との連携

(2) 学年主任のコーディネート機能

本校の学校経営方針の中に「家庭・地域や関係機関との連携を密にした教育活動を推進し，生徒の健全育成を図る。」とある。学年で家庭・地域・関係機関と連携する場合に，学校の窓口として，学年主任のコーディネート機能としての役割が考えられる。その場合学年主任は，連携の準備段階での綿密な計画と，連携実施時の速やかな対応が要求される。学年主任がコーディネーターとなって，家庭・地域・関係機関と連携を図る場面は，学校・学年の実情にもよるが，下記のような場面が考えられる。

○ 総合的な学習での連携
- 職業講話や実際の職場での体験学習
- 進路講演会及び高校説明会
- その他総合的な学習における地域人材活用

○ 学活や道徳の時間での連携

生徒一人ひとりの良さや可能性を活かすことと，学年教師の協働体制作りを効果的に行うために，今後は学年会での「エンカウンター勉強会」や，学活の時間で「エンカウンターの活用」の時間を設定して，関係機関とのコーディネート計画を試みる。

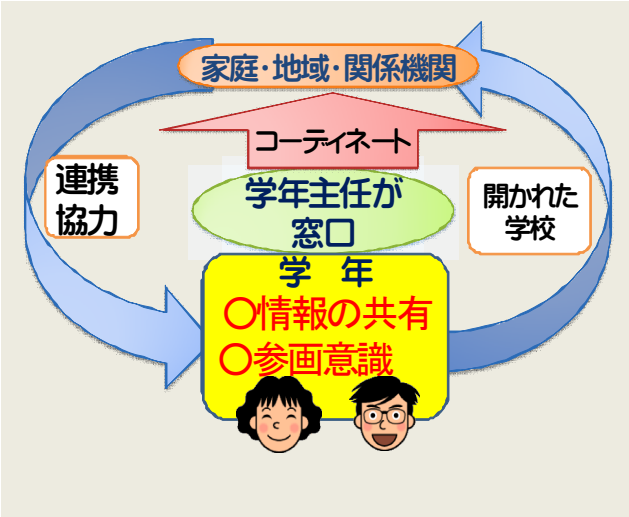


図６ 学年主任のコーディネート機能

(3)　実践計画

表３　Q-U 実践活動計画表

実施日	活動名	活動目標	活動内容
6 月 21 日	Q-U 勉強会	○目的の共有化，目的達成の意欲を図る。 ○教師各々の資質の向上を図る。 ○Q-U の意義，活用方を学ぶ。	○ビデオ視聴による勉強会の計画と提案。 ○ビデオ「Q-U 実践講座」を視聴し， プリント資料を活用した勉強会
9 月上旬	Q-U 活用実践①	○KJ 法により，学年教師がクラスの状況を把握できる。 ○学年教師による意見交換と，支援・指導の手だてを考えることで，教師の参画意識が高まる。	○KJ 法による参加型実践の計画と提案。 1. 担任による学級状況説明 2. 参加者による質問 3. 要因を考える 4. 要因をカードに記入 5. 要因のランキング付け 6. 対応策の検討 7. 対応策をカードに記入 8. 対応策のランキング付け 9. 担任のこれからの方策
9 月上旬	Q-U 活用実践②	Q-U 活用実践①と同様	Q-U 活用実践①と同様
9 月中旬	エンカウンター勉強会	○目的の共有化，目的達成の意欲を図る。 ○地域人材を講師として活用し，学校と地域の連携を図る。	○地域人材（保護者）の登用をコーディネート。 ○講師によるエンカウンター勉強会。
10 月上旬	エンカウンター実践	○生徒間の対人関係能力高める	○講師によるエンカウンター実践

３　学年活動計画表の作成

生徒や教師のアプローチする手だて

(1) 作成の意義

生徒一人ひとりの良さや可能性を活かす上で大切なことは，学年教育目標の実現を目指した円滑な学年経営である。学年活動計画表は，学年教育目標の実現を効率的に達成するための，活動の内容を記述した計画書である。

柔軟性と弾力性を持つ計画表

(2) 作成の留意点

学年活動の年間の P-D-C-A サイクルと，各行事の P-D-C-A サイクルに基づいて，項目を学年活動の計画と評価を行う担任会 / 学年会，生徒の直接的な活動である総合的な学習・学活・道徳・プログラム委員会・学年集会，さらに生徒の活動意欲を喚起つける学年 / 学級環境の工夫をそれぞれ関連付けて，2 学年の学年活動計画表を作成した。

活動計画表の運用にあたっては，作成された計画通りに実行することが必ずしも適切ではない。活動計画表は展開される状況の変化に対応して，柔軟性を有するものとしてとらえる必要がある。したがって，一度作成された活動計画表も状況に応じて弾力的な修正を加えることも必要と考える。

表４　学年活動計画表

	学校／学年行事	学年会／担任会	総 合	学 活	道 徳	プログラム委員会	学年集会	学年／学級環境
P D 4月	・始業式 ・健康診断 ・家庭訪問 ・遠足(D) ・学年/学級 PTA	・学級担任/学年分掌決定 ・学年経営方針 ・学年目標 ・学年経営計画 （共通確認） ・保護者からの要望検討 ・遠足実施計画(P) ・遠足評価(C/A) ・学年/学級 PTA 持ち方	・『職場体験』学習 1.オリエンテーション 2.事業所開拓 3.生徒希望調査	・学級びらき （役員/係決定） ・受診マナー ・遠足の取り組み	・よりよい自己の追求 ・育み合う友情 ・自分を好きになる	・プロ委員会組織作り ・「二学期の決意」発表 （学年代表） ・遠足での学年レクの計画/実施/評価	・学年教師紹介 ・学級役員紹介/決意発表	・月行事予定掲示 ・学年通信 ・学年目標・スローガンの掲示
5月	・第１回 Q-U(D) ・校内陸上(D) ・中間テスト ・生徒総会	・Q-U の実施方法(P) ・生徒の把握(C/A) ・校内陸上実施計画(P) ・校内陸上評価(C/A)	4.事業所別クラス編成 5.履歴書作り/ポスター作り/電話対応法 6.マナー講習会	・選手決定 ・テストの取り組み （計画表作成） ・学級討議	・望ましい生活習慣 ・自然への畏敬 ・夢をもち続ける生き方→「職場体験」と関連		・連休の過ごし方 ・各クラスの紹介	・一学期の目標学級掲示 ・遠足スナップ写真掲示 ・月行事予定掲示
6月	・教育相談週間(D) ・地区夏季大会 ・期末テスト	・教育相談実施計画(P) ・生徒の把握(C/A)	7.事業所事前訪問 8.職業人の講話	・テストの取り組み （計画表作成）	・時と場に応じた礼儀→「職場体験」と関連 ・ともに生きる社会		地区大会応援心得	・月行事予定掲示 ・「地区大会まで○日」掲示 対戦相手/会場掲示
C A 7月	・職場体験(D) ・終業式 ・三者面談(D) ・県夏季大会	・「職場体験」最終確認(P) ・「職場体験」評価(C/A) ・一学期学年経営評価 ・三者面談実施計画(P) ・生徒の把握(C/A)	9.「職場体験」実施 10.事業所へのお礼状作成	・１学期の反省 ・夏休み計画表作成	・誠実な心 ・郷土に尽くす	・「職場体験」出発式運営 ・「１学期の反省」発表 （学年代表）	・「１学期の反省」発表 （各クラス代表）	・月行事予定掲示 ・「県大会まで○日」掲示 対戦相手/会場掲示

	学校／学年行事	学年会／担任会	総 合	学 活	道 徳	プログラム委員会	学年集会	学年／学級環境
P 8月	・校内研 ・リーダー研修	・学年研修 ・休業中の生徒の様子把握				・リーダー研修参加		
D 9月	・始業式 ・教育相談旬間(D) ・「職場体験」報告会(D) ・地区陸上	・二学期に向けての課題と指導の重点 ・教育相談実施計画(P) ・生徒の把握(C/A) ・「職場体験」報告会計画(P) ・評価(C/A)	11.「職場体験」報告会への取り組み 12.「職場体験」報告会 13. 評価	・学級体制作り（係決定）	・強い正義感 ・目標に向かう意志 ・よりよい社会の実現 ・法の遵守	・「二学期の決意」発表（学年代表） ・プロ委員会組織作り	・学級役員紹介/決意発表	・月行事予定掲示 ・二学期の目標学級掲示 ・「職場体験」報告会の資料掲示 ・「地区陸上まで○日」掲示
10月	・第２回 Q-U(D) ・中間テスト ・読書旬間 ・地区駅伝	・「修学旅行」計画（随時） ・Q-U の実施方法(P) ・生徒の把握(C/A) ・「学力到達度調査」に向けての取り組み計画	・『修学旅行』 1.オリエンテーション 2.班編成 / 係り決め	・テストの取り組み（計画表作成） ・「学力到達度調査」学級取り組み計画	・人間のすばらしさ ・かけがえのない家族 ・自然への感動 ・暖かい人間愛	・修学旅行委員会組織作り	・「修学旅行」集合訓練（随時） ・「学力到達度調査」学級取り組み発表	・月行事予定掲示 ・「修学旅行」関連資料掲示 ・読書旬間啓蒙集会 ・「地区駅伝」選手・コース紹介掲示
11月	・合唱コンクール(D) ・期末テスト	・合唱コンクール学年計画(P) ・評価(C/A)	3.九州各県を知ろう 4.エリア学習計画	・テストの取り組み（計画表作成）	・自己を生かし輝く集団 ・かけがえのない命 ・責任ある判断		・合唱コンクール学級取り組み発表	・月行事予定掲示 ・「合唱コンクールまで○日」掲示
C A 12月	・学力到達度調査 ・修学旅行保護者説明会 ・三者面談(D) ・終業式	・修学旅行保護者説明会計画 ・三者面談実施計画(P) ・生徒の把握(C/A) ・*２学期学年経営評価*	5.しおり読み合わせ	・２学期の反省	・社会への奉仕 ・理想の実現 ・思いやる心	・「２学期の反省」発表（学年代表）	・「２学期の反省」発表（各クラス代表）	・月行事予定掲示 ・大掃除（学年生活空間/教室）

P

D

C

A

	学校／学年行事	学年会／担任会	総 合	学 活	道 徳	プログラム委員会	学年集会	学年／学級環境
1月	・始業式 ・地区新人大会	・三学期に向けての課題と指導の重点	6.係りの取り組み（全体→係会） 7.事前学習発表会	・学級体制作り（係決定） ・修学旅行学級レク	・家族への敬愛 ・国を愛する心 ・正しい異性理解→「修学旅行」と関連	・「三学期の決意」発表（学年代表） ・プロ委員会組織作り	・学級役員紹介/決意発表 ・修学旅行集合訓練	・月行事予定掲示 ・「今年の一文字」掲示
2月	・修学旅行(D) ・学年末テスト ・教育相談週間(D)	・修学旅行最終確認(P) ・評価(C/A) ・教育相談実施計画(P) ・生徒の把握(C/A) ・次年度計画（進級判定/学級編成/要録記入等）	8.最終確認 9.「思い出のスクラップ」作り	・テストの取り組み（計画表作成）	・家族への敬愛 ・国を愛する心 ・正しい異性理 ・正義を重んじる心 ・愛校心 ・良心に恥じない生き方	・修学旅行出発式運営 ・修学旅行宿泊施設への入館退館式運営		・三学期の目標学級掲示 ・「地区新人大会まで○日」掲示 ・月行事予定掲示 ・修学旅行スナップ写真掲示
3月	・卒業式(D) ・修了式	・卒業式の学年取り組み(P) ・評価(C/A) ・学年経営評価	10.「修学旅行展」の取り組み 11.修学旅行展 12.評価	・この１年を振り返る ・次年度の目標	・他を思いやる心 ・責任ある判断	・「この１年を振り返って」発表（学年代表）	・「この１年を振り返って」発表（各クラス代表）	・年度末大掃除（学年生活空間/教室）

４　学年経営評価表の作成

成果と課題を反映させる

アンケート項目 10 の結果で，学年経営評価表があまり実施されていないことがわかった。しかし，学年経営評価表は，学年教師によって客観的に評価され，評価の結果が経営改善や活動の問題解決に役立つとされている。そのためにも各学期毎と，各行事ごとに評価を実施して，成果と課題を確認し，得られたデータについては学年で共有するようにしていけば，今後の学年教育活動の改善に向けた取り組みに活かすことができると考えられる。

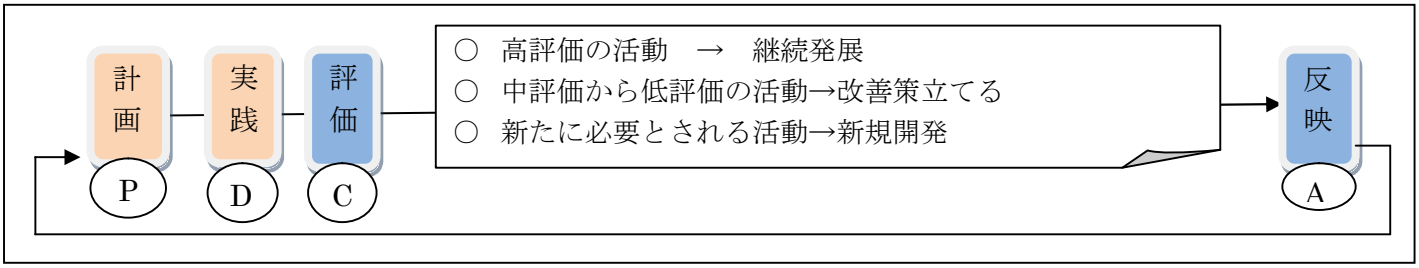


図７　学年経営の P-D-C-A サイクル

表５　学年経営評価表

学年経営評価表案（各学期用）

よい＝４　どちらかというとよい＝３　どちらかというと要改善＝２　改善＝１

対象	番号	観　　点	評価	平均	成果　/　課題
学年全職員	1	学年経営は，学校教育目標・方針に沿って実施されている。	４３２１		
	2	担任会及び学年会では，積極的な意見交換がなされている。	４３２１		
	3	学年の活動は，計画通り実施されている。	４３２１		
	4	学年の活動では，役割分担が均衡化されている。	４３２１		
	5	学年の活動では，情報の共有化がなされている。	４３２１		
	6	学年の活動では，協働意識（協力や支援）が十分にある。	４３２１		
	7	学年の活動では，成果と課題が評価され、次回への改善に活かされている。	４３２１		
担任	1	生徒一人ひとりを理解し，適切に指導している。	４３２１		
	2	「月別生活目標」にそって指導を実施している。	４３２１		
	3	学習に適した教室の環境整備に努めている。	４３２１		
	4	保護者との連携を密にしている。	４３２１		
担外	1	生徒一人ひとりを理解し，適切に指導している。	４３２１		
	2	「月別生活目標」にそって指導を実施している。	４３２１		
	3	学級運営等で担任の支援ができている。	４３２１		
自由記述欄					

Ⅵ　研究のまとめ

本研究においては，生徒一人ひとりの良さや可能性を活かすための学年経営の在り方について，学年経営の理論研究及び，教師の実態調査や実践（学年活動計画表の作成・学年経営評価表の作成）を通して探った。

1　教師の実態から，学年経営を考える

教師間での協力

教材の共有化

副担任の協力

『多忙感』について，95%を越える教師が何らかの形で多忙感を感じている。多忙感を感じる要因としては，「校務分掌」に関するが最も多い。続いて「学習指導」「学級事務」「部活指導」で全体の約 90%を占めている。とりわけ「校務分掌」に関することは，教師の業務の多様化がある。一方で校務分掌の個人的な偏りも考えられる。学年としては，学年職員間で協力し合える雰囲気が大切である。「学習指導」に関することは，学習教材などの共有化を図って活用する等の工夫が必要である。「学級事務」に関しては，副担任も積極的に担任を補佐する体制が必要である。

コミュニケーション

協働意識

情報の共有化

『コミュニケーション』については，52%が不足を感じている。教師が多様な職務に携わり，それに伴う多忙さからコミュニケーションの時間が取りにくいと言える。『学年構築体制』については，「コミュニケーション」「協働意識」「情報の共有化」で全体の 87%を占めている。「情報の共有化」は、目標達成のために教師がそれぞれに情報を共有し，実践に向けて気持ちを一つにする意味がある。「協働意識」は，目標達成のために教師各々が参画意識を持つことと，教師間での協力と支援を意味する。また，学年組織は数名で構成されているので，お互いの信頼関係が大切であるから，「コミュニケーション」で自分の考えや，仲間の考えを交換することで，お互いを理解し合うことができる。特にこの 3 点がうまくかみ合えば協働体制が可能になると思われる。

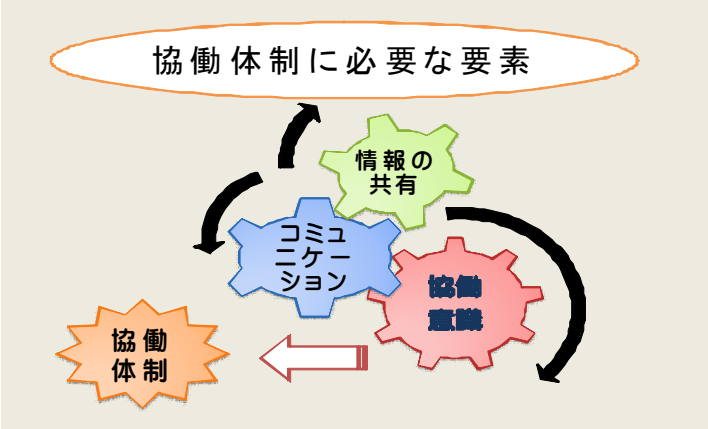


図８　協働体制に必要な要素

担任会

「コミュニケーション」「協働意識」「情報の共有化」をキーワードに，よりよい担任会の活用について考えたい。担任会は島尻地区の多くの学校で時間割の中に位置付けられている。その構成員は，学年主任と担任である。担任会の中で「コミュニケーション」「協働意識」「情報の共有化」が図られ，それが果たす役割は大きい。しかし，時には担任がその時間に追われている現実もある。担任会の利点をもっと活かすために，話し合う内容の再考や時間の見出し方など検討の余地があるかもしれない。学年主任として，担任会で話し合う内容の再考を図り，担任が参加して良かったと思える内容や，参加したいと思わせる環境作りを計画していく必要がある。担任会の実施に以下の提案をしたい。

(1) 行事日程の確認は紙媒体で事前にしらせる。

(2) 生徒指導を含めた各学級の様子は，事前に担任より情報を入手しておき，紙媒体（必要な場合は話し合い）で共有化を図る。

指導力向上を磨く場

生徒一人ひとりの良さや可能性を活かすためには，我々教師の学級経営，学習指導，生徒指導力・保護者との対応力等の指導力の向上が不可欠である。担任会が慣例的な行事日程の確認や，生徒指導の情報交換にだけ時間をとられるのではなく，上記提案で見出された時間を利用して，担任の指導力向上の情報交換の場であるようにしたい。そうすることで，担任が学級経営及び学年経営への参画意識を持つことにつながる。すなわち，協議事項と確認事項の明確化が必要である。

２　Q-U の活用から

Q-U 活用の勉強会の中で，学年教師が Q-U を有効的に活用していく方法が話し合われ，学年教師間で「共通の目標」「コミュニケーション」「協働意識」「参画意識」などが図られ，教師の協働体制を可能にすることができた。今後は KJ 法を取り入れた参画型研修会や，専門家によるエンカウンターの実践をコーディネートするような計画，立案を学年会で提案していきたい。

３　学年活動計画表の作成から

学年活動計画案を作成することは，学年活動や学校行事も含めた中で，生徒や学年教師が関わることへの手だてを明確にすることである。

特に学年活動計画の時期や方法は，学校行事との関連を図って，生徒の学年特有の発達段階に応じて，内容の精選と手だての見通しを立てて計画することが大切である。学年教師が活動計画に沿って協力しあうことが，教師各々が学年経営に責任ある参画意識を持つことになり，教師の協働実践につながると考える。また，生徒も学年活動に積極的に参加することによって，学年への所属感を深めることができる。

留意点

今回作成した学年活動計画表の特徴として以下の点を留意した。

(1) 一つ一つの行事についての P-D-C-A サイクルを表記したこと。

(2) 一つ一つの行事について，学年会/担任会・プログラム委員会・学年/学級環境をそれぞれ関連付けて表記し，教師の活動及び生徒の活動がわかりやすいようにまとめた。

４　学年経営評価表の作成から

アンケート項目 10 の『評価表を使って成果と課題を評価しているか』については，「評価していない」と「どちらかといえば評価していない」を合わせると 49%で過半数に近い数値を示し，さらに「必要性を感じない」の 11%を加えると 60%の高い数値を示している。この結果からも学年経営の P-D-C-A サイクルの中でも、あまり実施されていないと思われる。学年経営評価は、学年経営改善のために行われ，学年の活動計画や、組織運営が効果的に実施されたかどうかを評価するものである。学年の教育活動が効果をあげるためにも，評価表の活用が必要だと考える。

留意点

今回作成した学年経営評価表の特徴として以下の点を留意した。

(1) わかりやすく短い時間で記入できるように，観点を厳選した。

(2) 学年職員全員，担任，担任外と対象項目を分けた。

(3) 学期ごとで評価することによって，すぐに次学期での改善に反映できる。

Ⅶ　研究の成果と今後の課題

１　研究の成果

(1) 島尻管内の教師の実態調査を実施することによって，学校現場・職員の意識を把握することができた（Ⅴ－１）。

(2) Q-U 活用の勉強会を実施することにより，学年教師間の目的を共有化することで，協働体制が構築できた（Ⅴ－２）。

(3) 教育活動の P-D-C-A サイクルを基に，学年年間活動計画表（２学年）を作成することができた（Ⅴ－３）。

(4) わかりやすく短い時間でも，記入しやすい学年経営評価表を作成することができた（Ⅴ－４）。

２　研究の課題

(1) Q-U 活用，エンカウンター活用後の生徒への支援援助の工夫と継続指導。

(2) 学年活動計画表及び，学年経営評価表を検証活用し，より効果的な学年経営の工夫と展開。

(3) 学年の協働体制を継続発展させていくための，より効果的な実践活動の工夫と展開。

〈主な参考文献〉

沖縄県教育委員会	『学校教育における指導の努力点』		2010
沖縄県教育委員会	『沖縄県教育振興基本計画 第３次沖縄県教育推進計画（改訂版）』		2009
日俣周二編集	『学年経営』	第一法規	1978
吉本二郎・永岡順編集	『学年・学級経営』	ぎょうせい	1980
下村哲夫編集	『学年・学級の経営』	第一法規	1982
高階玲治編集	『組織活性化を目指すマネジメント』	教育開発研究所	2009